

認知症と遺伝

日本人の一番なりたくない病気は、認知症だという。そのせいか、親が認知症だと自分も？と、やたら不安がる人もいる。

57歳のTさん。高血圧に糖尿病、脂肪肝もある。ある日、「この頃、忘れっぼい。人や物の名前が出てこない。母親が認知症だったから、遺伝では？」と青ざめている。が、検査をしても異常はない。もちろん、認知症ではない。

認知症の中で一番多いのは、アルツハイマー型認知症（AD）だ。が、ADには、家族性と孤発性の二つのタイプがある。そのうち、遺伝するのは、家族性ADだけである。このタイプは、20代後半から50代と若年発症で、進行も早い。親が家族性ADの場合には、その子供は50%の確率で発症するという。その原因遺伝子も分かっている。

だが、家族性ADは、全患者の1%以下とごく稀なものである。Tさんのお母さまの発症は70歳を過ぎてからだ。おそろしくは、孤発性ADであろう。Tさんへの遺伝は考えにくい。

一方、ADの直接の原因にはならないが、発症頻度を高めてしまうという遺伝子がある。これを感受性遺伝子と呼ぶ。中でも、ADの発症と関係が深いのが、アポリポタンパクE4遺伝子（APOE4）である。この遺伝子は、日本人の10〜15%が持っている。APOE4を持つと、3〜5倍ADになりやすいという。

ところが、APOE4の保有者だと分かっていても、遺伝子の治療もADの発症予防もできないのだ。となれば、遺伝子の検査も患者さんの不安を増幅させるだけマイナスか。そつだ。APOE4保有者でも、ADになるとは限らない。APOE4が、生活習慣や高血圧、糖尿病などの病気と関係し合って認知症を発症させるのである。というのに、Tさんは、禁煙も節酒もしてくれない。どうしよう。

（石黒修三＝いしほくろ三ツツク・脳神経外科医）
222 北國新聞掲載